〔展覧会随想　その４〕

美術館の建築について

最近でも、公立を主とする新しい美術館がしばしば開館されます。そういう新しい館をお訪ねすると、「建築の設計は有名な何々先生です」とか「知事が建築家の何々先生と親しいので、設計をお願いしました」とかの話をよく聞きます。確かに、美術館は単なる実用的な展示施設だけではなく、内部空間として展示品を引立て、外観として自然美や環境美に奉仕することが必要です。そこで、美術館の設計にすぐれた建築家が参加することは重要な条件となるわけで、私は何もそれを否定しようというつもりはありません。

ところが、有名建築家の設計になる美術館は、美術雑誌や建築雑誌で華やかに紹介されても、その館の館員には意外に不評な場合が多いようです。特に、美術館で中心的な仕事をする学芸員によると、有名建築家の作品はしばしば美術館として使いにくく、「美術品搬入口に美術品輸送車を入れると、シャッターがしまらない」とか「展示ケースの開閉に力が掛かりすぎる」などの苦情をよく聞きます。また、専門の館員ばかりでなく、一般の観客の方からも、「出入口がわかりにくい」とか「展示品が見にくい」とか「外観が奇妙すぎる」とかの批判が起こることがあるようです。

もちろん、建築も美術の一分野でしょう。しかし、それは絵画や彫刻とは違って、実用に奉仕すべきものです。また、陶磁器や漆器などの工芸品のように、個人的な趣味によって選択できるものではなく、その大きさによって利用者を規制します。これは建築というものの性質上仕方のないことであり、また当然とも申せます。

ちなみに、個人の住宅、マンション、あるいは学校、会社、官庁などでも、有名建築家が設計する場合があります。しかし、個人の住宅はもちろんそこに住む人の意志が尊重されますし、マンションなどは気に入ったものを選ぶことができます。また、学校、会社、官庁などの建築の場合は、もちろん建築家の美意識よりも、実用性に重点が置かれます。ところが、美術館の場合は芸術という非日常性に奉仕するものと考えられているため、しばしば建築家はその場を借りて、「作品」を作ろうとしすぎるようです。

もちろん、始めに言いましたように、美術館は単なる実用建築であってはならず、眼を楽しませる「夢の空間」であるべきでしょう。しかし、それはまた実用に供されるものですから、建築家の「遊び心」が強くなりすぎてはならないでしょう。そこで、今後美術館を設計される建築家の方がたは、そこで働く職員などの意見をよく聞き、また入館者の便宜も十分に考慮して設計に当たっていただきたいのです。また、美術館を設立する際の当事者も、設計を建築家にまかせきりにせず、そこで働く学芸員や事務職員の意見がよく反映されるように、計画を立てるべきだと思います。もちろん、新しい美術館の場合、そこで働くべき館員が経験に乏しいことが多いでしょう。しかし、その場合は先輩館の館員の意見をよく聞いてから、建築家に設計を依頼していただきたいのです。

もちろん、美術館建築として、美観ばかりでなく、実用性にも成功している例は多くあります。たとえば、大阪市立東洋陶磁美術館は有名な安宅コレクションを所蔵し、陳列している古陶磁専門の美術館ですが、初めにコレクションがあったため、陶磁器の展示に適するよう十分に考慮して設計されました。そして、その建築は陶磁器研究の専門家である現館長が美術館をよく理解し、しかも美術品を愛好するすぐれた建築家とよく打合わせをして、設計が進められました。そこで、この館は昭和57年11月の開館以来、もう10数年を経ていますが、余り苦情の声を聞いたことがありません。

また、平成６年４月に開館した秋田県立近代美術館（横手市）の場合があります。この館の職員の方は、かつて秋田県立博物館に勤務されていたため、経験が豊富でした。そこで、新しく美術館を建てるに際し、全国各地の先輩館の意見を広く聴取されましたが、有名建築家に頼むと、使いにくい美術館になるという苦情が多かったそうです。そこで、秋田県立近代美術館の場合も、有名建築家でなく、館員と建築業者の話しあいにより設計が進められました。

もちろん、私は何も建築家の悪口を言おうとして、この一文を書いたつもりはありません。現代の有名建築家の設計により、美術館のユニークな試みとして注目されている例もあります。それは岡山県東北部の小さな町に、平成５年秋に開館した奈義町現代美術館が好例です。この館では設立を決めたとき、まず宮脇愛子、岡崎和郎、そして荒川修作・マドリン・ギンズ（共作）らの現代美術家に立体造形の制作を依頼しました。そして、作品ができあがると、それに合わせて建築家の磯崎新さんが設計を担当されたそうです。そこで、磯崎さん何はばかることなく、思い通りに設計を進めることができたでしょうし、またそれによってこそ、奈義町現代美術館は成功したと言えるでしょう。

しかし、大多数の美術館は、いつもきまった陳列品を恒久展示しているわけではありません。現代美術が展示されることも、古美術品が並ぶこともあります。また、東洋美術の場合も、西洋美術のときもあります。そして、絵画や彫刻のことも、あるいは陶磁・漆工・ガラス・染織などのこともあるでしょう。さらに、美術館を訪れる観客の年齢や趣味も、展覧会によって変わることでしょう。

そこで、今後美術館を設立し、設計にあたる方がたは、いろいろな展示に広く適応するように、またそこで働く館員のことやその館を訪れる観客のことを十分に考えていただきたいと思います。それが美術館に34年間勤務してきた私の願いです。

最後に、最近の阪神大震災により、被害を受けた美術館がありました。あの地震は予想を越えるほど強いものでしたので、その美術館の設計に当たった建築家や施工業者を一概に責めることはできません。また、被災した美術館に対し、結果論めいた批判を加えることはつつしむべきでしょう。しかし、それでもなお、今回の震災で被害を受けた美術館の中に、建物の強度や安全性よりも、デザインを重視した例はなかっただろうかという思いに、私は駆られます。

（次長・成瀬不二雄）

秋田県立近代美術館（横手市）

季刊 美のたより No.110
平成７年３月１日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.